

千里ニュータウンで育った人のまちへの思い入れに関する研究

大阪大学大学院工学研究科 白井 清兼
大阪大学大学院工学研究科 岡 絵理子

1. 研究の背景と目的

千里ニュータウンは、我が国最初の大規模なニュータウンとして建設された計画的な市街地である。建設当時は「人工的につくられたコンクリートの街」とも言われてきたが、1962年のまちびらきから40余年が経過した現在、十分に取られた緑地や公園の木々は成長し、緑豊かな街となっている。しかし、初期に建設された建築物の老朽化や、土地の転売などのため、建物の更新や新規建設が相次ぎ、大規模化、高層化が進んでおり、千里ニュータウンの景色が大きく変わろうとしている。

一方、住民参加型のまちづくりが主流となっている昨今、まちに思い入れをもつ人々の存在が、まちが持続的に良好な居住環境を保ち続けることができるかの重要な鍵となっている。

そこで、本研究では、千里ニュータウンの今後を担う、千里ニュータウンで育った人々が、千里ニュータウンをどのようなまちと認識しているか、思い入れをもつ場所はどこにあり、どのような場所であったかを調査することにより、人々の記憶をつなぎとめる場として配慮すべき場所の抽出を行い、今後の市街地更新をすすめるうえでの知見を得ることを目的としている。

2. 調査の概要

千里ニュータウンで子どもの頃(小学生期とする)を過ごした現在25歳前後の男女を調査対象者としてアンケート調査を行った。具体的には様々な供給主体の共同住宅や一戸建住宅の多様な住宅形式を抱える住宅地で構成され、千里ニュータウンの中で最も早くまちびらきが行われた吹田市佐竹台及び高野台を校区とする高野台中学校の卒業生に対し、卒業生のネットワークを用いて調査を依頼した。⁽¹⁾

調査票は2004年12月下旬に郵送配布、2005年1月上旬に郵送回収した。調査票は58票を配布し39票を回収した(回収率67.2%)。小学生当時高野台中学校区に居住していなかった1名を除く38票を有効票とし、有効回収率65.6%を得た。

回答者の内訳は、男性が22名、女性15名(性別不明1名)であり、年齢は17歳から28歳まで、平均年齢は男性25.3歳、女性22.5歳、全体で24.1歳となった。回答者の千里ニュータウンに居住していた時の住宅形式は共同住宅28名、戸建住宅9名(住宅形式不明1名)であった。また、現在の居住地は、現在千里ニュータウンが28名、千里ニュータウンを除く大阪府内が4名、大阪府外が5名であった。

調査項目は、千里ニュータウンを現在どのように認識しているか、子どもの頃に遊んだ場所、お気に入りの場所、秘密の場所、怖い場所について、それぞれの場所(地図上にプロット)そこでしたこと、場所の様子についてである。

3. 千里ニュータウンに対する現在の意識

以下、調査結果について述べる。

千里ニュータウンをふるさと思うかどうかを尋ねたところ、有効回答者数36名のうち、「『ふるさと』といえる」という回答が25名(69.4%)、「今後『ふるさと』になるだろう」が7名(18.4%)、「『ふるさと』といえるほどではない」が4名(10.5%)であった。なお、「『ふるさと』は別にある」と答えた回答はなかった。このことから、回答者の千里ニュータウンに対するふるさと意識は高いといえる。

千里ニュータウンは子どもを育てるのに良い環境だと思うかどうかを尋ねたところ、有効回答者数36名のうち、「大変そう思う」という回答が15名(41.7%)、「そう思う」が19名(52.8%)、「あまり思わない」が2名(5.6%)であった。「大変そう思う」「そう思う」あわせて9割の人が肯定的な評価をしており、千里ニュータウンは子供を育てる環境として評価されているといえる。

今後の居住地を尋ねたところ、有効回答者数36名のうち、「千里ニュータウンに住みたい」という回答が

21名(58.3%)であった。また、「自然が豊かなところに住みたい」が6名(16.7%)、「新しく計画されたまちに住みたい」が3名(8.3%)であった。これらは千里ニュータウンが持つ特徴であると考えられる。「都心に住みたい」「歴史があるまちに住みたい」「その他」がそれぞれ2名(5.6%)であり、これらは千里ニュータウンにはない特徴である。また、「下町に住みたい」を選んだ回答はなかった。

4.子どもの頃の思い出の場所

地図上にプロットされた調査結果は、用途により地域を分類し、地域別に集計した。また、記述内容もカテゴリーに分けて集計した。

4.1.遊んだ場所

遊んだ場所と内容を一人三箇所まで答えてもらったところ、103の遊び場が挙げられた。遊んだ内容を集計し、仙田による遊びの分類¹⁾を参考にして12種類に分類した(表1)。なお、一つの遊び場において「野球・サッカー」など同一分類内の遊びが挙げられた場合は、まとめて1カウントとした。

戸建住宅地域(戸建住宅地域の回答者9名に対して8箇所)・共同住宅地域(同28名に対して39箇所)、公園⁽²⁾(34箇所)が主な遊び場になっている。戸建住宅地域や共同住宅地域の遊び場は多くが自宅近くにあり、様々な種類の遊びが行われている。特に、共同住宅地域の遊び場は戸建住宅地域に居住していた者も2名が挙げており、遊び場として魅力的であったと考えられる。公園では、場所ごとに特徴的な遊びが行われている。地区公園などの大規模公園ほど遠くからも遊びに出かけており、遊び場の規模と遊びに来る距離は比例関係にある。中央センター・地区センターや近隣センターを答えた人は少なく、周辺緑地を答えた人はいなかった。

表1 遊んだ場所・内容

	遊び分類											合計	
	大人数での球技	少人数での球技	おにごっこ類	頭の遊び(ゲーム類)	コミュニケーション遊び	遊具遊び	乗り物遊び	身体遊び	造形遊び	自然遊び	道具遊び		場の遊び
戸建住宅地域	0	2	3	0	0	2	0	0	0	1	2	0	10
共同住宅地域	8	8	20	0	2	8	2	0	0	2	4	5	59
地区センター	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2
近隣センター	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
学校	6	1	3	0	0	2	1	0	0	1	0	0	14
公園	6	3	8	0	1	5	2	4	0	8	3	3	43
周辺緑地	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
室内	0	0	0	6	2	0	0	0	3	0	0	0	11
不明	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2
合計	21	14	42	8	5	17	7	4	3	12	9	8	142

4.2.怖い場所

怖い場所の有無を尋ねたところ、有効回答者37名のうち「もっていた」者は20名(54.1%)、「もっていなかった」者は17名(45.9%)であった。男女別では、男子の38.1%(8名)に対し女子の73.3%(11名)が怖い場所をもっており、女子のほうが多い。

怖い場所として、階段・一本道(8)や池の周り・茂み(7)、建物(4)などが挙げられた。これらの一部は遊び場である公園や学校の構成要素でもあるが、遊び場の特定の箇所が怖い場所となっていたり、時間帯によって怖いと感じる場所になっていたりにしている。

怖さの種類として、実際の危険性に由来する怖さ、場の雰囲気由来する空想的な怖さ、実際の危険性が発展した空想的な怖さが挙げられた。また、怖い場所はその場所にまつわる話や独自の名前がつくことが多い。ある場所に対する共通の話が存在する一方、少し異なる派生的な話が存在することもある。

4.3.秘密の場所

秘密の場所の有無を尋ねたところ、有効回答者37名のうち、「もっていた」者は15名(40.5%)、「もっていなかった」者は22名(59.5%)であった。男女別では、男子の42.9%(9名)、女子の40.0%(6名)が秘密の場所を持っていた。

秘密の場所は、共同住宅地域の茂み(5)、地区公園の林の中(3)や周辺緑地(2)に多く分布している。そこで行ったこととして探検や秘密基地・隠れ家作りといった場の遊び、基地でのコミュニケーション遊びが多く挙げられた。

4.4 お気に入りの場所

お気に入りの場所を尋ねたところ、33名から34箇所が挙がった。これらの理由を大きく7分類し、地域ごとに集計した(表2)。

その結果、共同住宅地域が14箇所挙がった。これらの場所の多くは、「団地の裏の広場(公園)」などの共同住宅団地内の共用スペースである。お気に入りの場所の理由として、「友達の存在」(8)「遊びの自由度」(3)が多く挙がった。また、総回答数が多いこともあるが、幅広い理由がみられた。

学校は9箇所が挙がり、「友達の存在」(4)、「遊びの自由度」(3)が主な理由であった。公園は6箇所が挙がり、幅広い理由がみられた。

表2 お気に入りの場所・理由

	お気に入りの理由分類							合計	
	友達の存在	家族の存在	景色	遊びの自由度	自分(たち)だけの場所	自然とのふれあい	非日常的な体験		その他
戸建住宅地域	0	0	1	0	0	0	0	0	1
共同住宅地域	8	2	1	3	2	0	0	2	18
地区センター	0	0	0	0	0	0	1	0	1
近隣センター	2	0	0	0	0	0	0	0	2
学校	4	0	0	3	1	0	0	1	9
公園	1	1	0	0	0	1	0	3	6
周辺緑地	0	0	0	0	0	0	0	0	0
室内	1	1	1	0	0	1	0	0	4
不明	1	0	0	0	0	1	0	0	2
合計	17	4	3	6	3	3	1	6	43

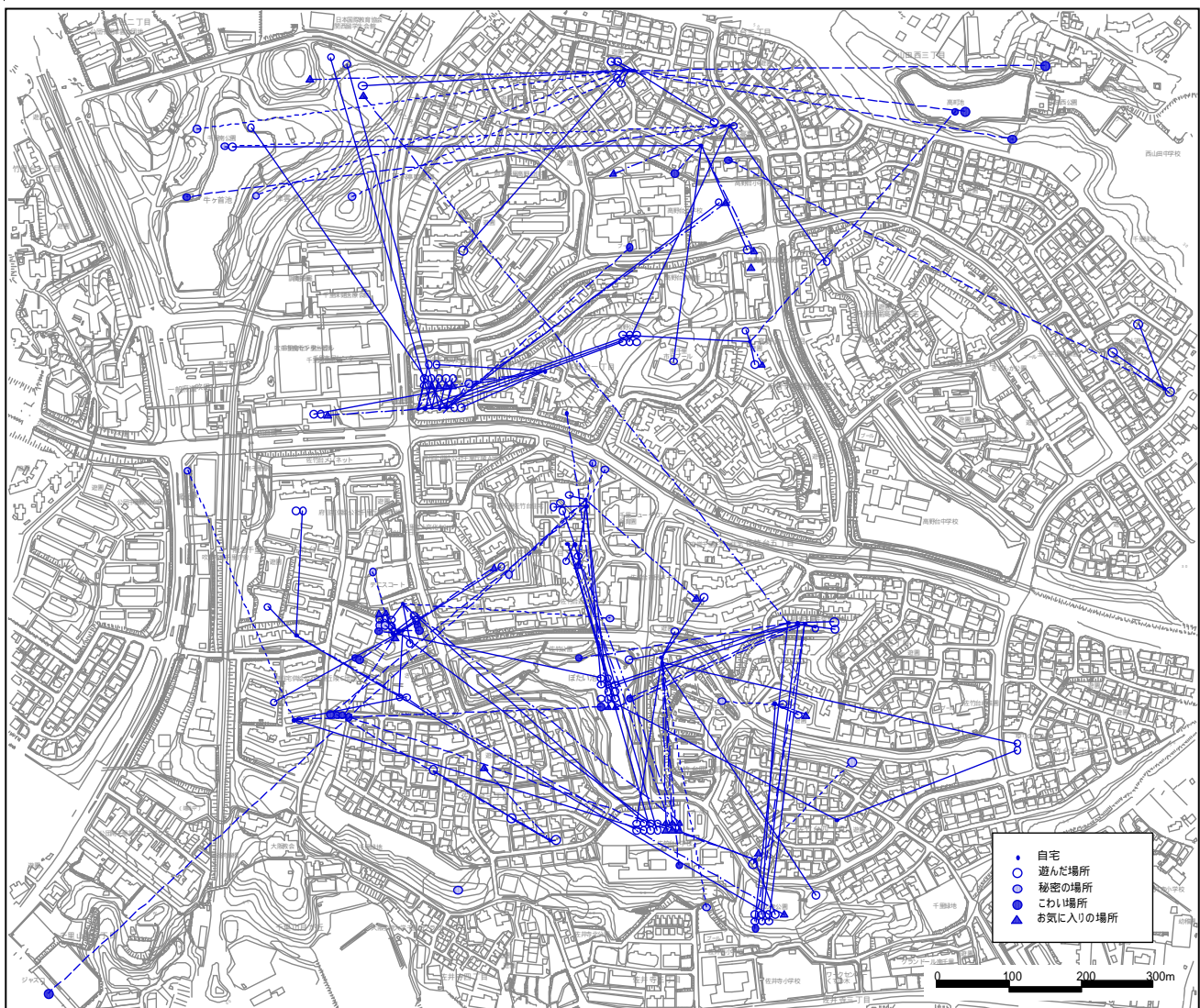


図1 遊んだ場所・秘密の場所・怖い場所・お気に入りの場所の分布

5.まとめと考察

本研究では、千里ニュータウン育った人は現在、育ったまちをどのように認識しているか、千里ニュータウンにはどのような思い出をもつ場所があるかを、子どもの頃の体験を通して調べた。

その結果、本調査の回答者は育ったまちに対して肯定的な評価をしていることがわかった。特に、千里ニュータウンをふるさとと思う人、及び今後ふるさとになると思っている人は約9割おり、計画的な都市千里ニュータウンもそこで育つ人々にとって思い出をもてるふるさとになっているといえる。

遊んだ場所及びお気に入りの場所は思い出がつまった場所であると考えられるが、そのような場所として公園や共同住宅地域が多く挙げた。公園には広いグラウンドや池など場所ごとに特徴的な遊び場の要素があって他の場所では体験できない遊びができ、遠くからも遊びに来ている。

共同住宅地域は、住宅の周囲に広場や斜面地といった多様な種類の空間があり様々な遊びが可能であること、あまり空間的に作りこまれすぎていないため使い方が制限されないことから、お気に入りの理由である「遊びの自由度」が、また、それらの遊び場は住棟の間にあり友達が集まりやすいことから、「友達の存在」が満たされていたといえる。また、これらの場所には茂みや使われていない建物といった特には用途を規定されていない空間、いわば隙間が存在する。秘密の場所として挙げられていたこれらの場所には子どもが主体的に使い方を見つける余地があり、そこで積極的な体験をすることによって思い出を持つ場所になっていると考えられる。

以上、千里ニュータウンで子どもの頃を過ごした人が思い出を抱く場所の抽出を行ったが、現在高齢化がすすむ千里ニュータウンは、子育て世帯だけではなく多様な世代が暮らせるまちであることが求められている。お気に入りの場所の理由として「友達の存在」が挙げたが、千里ニュータウンにおける今後の市街地更新のあり方として、様々な行為が可能な空間構成を残しつつ、同世代の子どもに限定しない多くの世代が交流できる場所を整備することが考えられるのではないだろうか。またその際、秘密の場所として用途を規定されない空間が挙げたように、場所を隅々まで整備するのではなく人がその場所に主体的に関わることができる余地が残されていることが必要であると考えられる。

補注

- (1)高野台中学校卒業生数人を通じて、小学生の頃佐竹台・高野台に居住していた友人に配布した。
- (2)地域分類の「公園」は、都市計画法における街区公園を除いた近隣公園以上の規模のものを対象とし、街区公園は共同住宅地域、一戸建地域に含めて集計した。

参考文献

- 1)仙田満(1984)「こどものあそび環境」, 筑摩書房

謝辞

本研究にあたり調査に協力して下さった方々をはじめ多くの方々に御協力いただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。